

## 提 言

## 子ども虐待防止と家族支援に向けて

藤枝幹也 (高知大学医学部小児思春期医学)

私どもは、2016年に当院で出生した子どもが、実母の虐待によりなくなってしまうという悲しい出来事を経験した。母に養育困難があると判断し、この子が当院で出生する前から、行政や児童相談所(児相)と協議を重ね、退院時にはいったん一時保護となったものの、その解除から数か月後に自宅で不幸な転機を起こしてしまった。

この事件から反省し、先進地域の取り組みを参考に2017年から院内にファミリーサポートチーム(FST)を設置した。私が委員長を拝命し、小児科医、小児病棟・外来看護師、NICU看護師、産婦人科医、産婦人科病棟・外来看護師、小児精神科医、精神科病棟看護師、ICU看護師、法医学教室医師および医療ソーシャルワーカーの多職種で構成された総勢24人からなるチームで、毎月1回、約1時間、気になる症例・家族について協議を行っている。当院の性格上、精神疾患合併もしくはボーダーラインの妊産婦の妊娠管理が多いためこのような妊婦(母親)とその子ども、そして、入院・外来受診例で問題のある(気になる)子どもについて、毎月のFST会議でプレゼンテーションをし、対策と同時に反省点も協議している。さらに、必要に応じて地域行政職員や児相職員も会議に同席してもらい、アドバイスをいただきながら、家族支援方法を探っており、同時に、通告症例のその後についても、情報共有を行っている。毎年20-40人の小児例と10-30例の妊婦(母親)例が気になる症例として追加されていき、現在、約330例に達している。多職種と多方面の方々のお蔭で、当院関係事例では2017年以降は最悪な状況は経験していない。

以上のように、院内出生例と気になる例に関しては虐待一次予防として取り組み、虐待疑い事例に関してはFSTとして児相に相談しながら2次予防としての迅速な対応に努めている。子どもが成人として自立できるまで追跡を行うことを目標にしているが、FSTの人員数の関係で、安定している事例では地域行政に重心を移し、必要時に情報交換を行っている状況である。また、FSTとして、院内職員全員を対象として、院外講師を中心に年2回の虐待(家庭内暴力も含む)対応に関する研修会を行い、特に初期研修医には受講を必須としている。

私どもFSTは、不適切な養育環境を是正すること、そして、必要に応じて児相や地域の方々の力をかりて、親御さんの支援をどのように具体化するかについての筋道を、親御さんと協働して作り上げようと努力している。FSTとしては良い対処として実行したことが、親御さんに十分に伝わらず関係が悪化したケースも存在し、まだまだ未完成・未熟な組織であることは認識している。しかし、今後も県内外の先進的取り組みを学びながら、日々、進化させていきたいと考えている。そして、どんな家族も排除せず、共生できる地域環境づくりのため、歩みを続ける考えである。

